

Tokyo Philharmonic Orchestra



東京フィルハーモニー交響楽団
第55回 千葉市定期演奏会

The 55th Subscription Concert in Chiba City



指揮 三ツ橋敬子 ヴァイオリン 岡本誠司
管弦楽 東京フィルハーモニー交響楽団

2023年2月8日 [水] 19時開演
千葉市民会館

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団 共催：公益財団法人千葉市文化振興財団 後援：千葉市

オフィシャル・サプライヤー

SONY

Rakuten

マルハン

LOTTE

ゆうちょ銀行

東京フィルハーモニー交響楽団

Tokyo Philharmonic Orchestra

第55回 千葉市定期演奏会

The 55th Subscription Concert in Chiba City

指揮 三ツ橋敬子
Keiko Mitsuhashi, conductor

ヴァイオリン 岡本誠司*
Seiji Okamoto, violin

管弦楽 東京フィルハーモニー交響楽団
Tokyo Philharmonic Orchestra

魅力満載! メンデルスゾーン

Mendelssohn's glamorous world

Program | 本日のプログラム

メンデルスゾーン: 序曲『美しいメルジーネの物語』Op. 32 (約10分)

Felix Mendelssohn: Overture "The Fair Melusine" Op. 32 (ca. 10 min)

メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op. 64*(約25分)

Felix Mendelssohn: Violin Concerto in E minor, Op. 64 (ca. 25 min)

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッシオナート

第2楽章 アンダンテ

第3楽章 アレグレット・ノン・トロポーアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

休憩 (15分)

— intermission (ca. 15 min) —

メンデルスゾーン: 交響曲第4番 イ長調 Op. 90『イタリア』(約30分)

Felix Mendelssohn: Symphony No. 4 in A major, Op. 90 "Italian" (ca. 30 min)

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェーピウ・アニマート・ポコ・ア・ポコ

第2楽章 アンダンテ・コン・モート

第3楽章 コン・モート・モデラート

第4楽章 サルタレッコ:プレスト

お願い: 演奏中に、時計やスマートフォン、補聴器などのアラーム音、電子音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

会場内でのマスク着用、こまめな手指の消毒、3密を避ける行動など感染症予防にご協力ください。

マスクは鑑賞中も着用くださいますようお願いいたします。

演奏中の途中入場はお断りいたします。楽章間のご入場については、楽曲の進行により係りがご案内いたします。ご入場いただけない場合もございますので、ご了承ください。



©Earl Ross

指揮 三ツ橋敬子

Keiko Mitsuhashi, *conductor*

東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とキジアーナ音楽院に留学。小澤征爾、小林研一郎、G.ジェルメッティ、E.アツツェル、H=M.シュナイト、湯浅勇治、松尾葉子、高階正光の各氏に師事。第10回アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールにて日本人として初めて優勝。併せて聴衆賞、ペドロッチ協会賞を受賞し、最年少優勝で初の3冠に輝いた。第9回アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールで女性初の受賞者として準優勝。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。2009年Newsweek Japan誌にて「世界が尊敬する日本人100人」に選出。



©Yuji Ueno

ヴァイオリン 岡本誠司

Seiji Okamoto, *violin*

第19回J.S. バッハ国際コンクールのヴァイオリン部門にてアジア人で初めて優勝し注目を集め、2021年ARDミュンヘン国際音楽コンクールヴァイオリン部門第1位入賞するなど受賞歴多数の実力派。現在はクロンベルク・アカデミーに在籍し、ベルリンにて研鑽を積みながら、日本およびヨーロッパでソロはもちろん室内楽など精力的な演奏活動を行っている。東京藝術大学を卒業後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学の修士課程修了。2022年文化庁長官より表彰。第31回出光音楽賞を受賞。ヴァイオリンはNPO法人イエロー・エンジェルよりM.ゴフリラー(1702年)の貸与を受け、(株)日本ヴァイオリンより名器貸与特別助成を受けている。

<https://seijiokamoto.net/>

解説◎片桐卓也

世界が認めた日本の若き才能に注目しよう

今回の演奏会に出演する指揮者・三ツ橋敬子、ヴァイオリニスト・岡本誠司のふたりは、いずれも国際的なコンクールで活躍し、世界がその音楽的才能を認めた演奏家である。日本の若い演奏家の躍進はサッカーと同じように欧米でも注目されており、そこから次代を担うアーティストとなる人も出てくるだろう。そういう点で、この演奏会は記憶に留めておいてほしいものとなる。すべてがメンデルスゾーンの世界という演奏会も珍しく、その意外性のなかに、意欲が感じられるプログラムである。

作曲家メンデルスゾーンと演奏曲目について



フェリックス・メンデルスゾーン
(1809-1847)

神童伝説というものがあるとしたら、クラシック音楽の世界ではまず18世紀のモーツァルト、そして19世紀では今日の演奏会で取り上げられるフェリックス・メンデルスゾーン(1809年2月3日-1847年11月4日)がその代表と呼べるだろう。メンデルスゾーンは富裕なユダヤ系銀行家の父のもとに生まれ、学校には通わず、家庭教師(といっても一流の学者たち)の教えを小さな頃から受けた。いわゆる英才教育である。姉ファニーも同じで、この姉と弟は若くしてその音楽的な才能を発揮した。

フェリックスの音楽的な師はフランスで学んだビゴー、そしてベルリンで学んだツェルターだが、その他にもフンメル、ロッシーニ、マイヤベーアなど当時の最先端の作曲家

と10代で交流し、17歳の時には現在でもよく演奏される『夏の夜の夢』(シェイクスピアの戯曲のための序曲)を作曲して絶賛されている。20歳の時には大先輩であるJ.S. バッハの「マタイ受難曲」をバッハの死後に初めて取り上げて、現在のバッハ演奏に繋がる第一歩を記した。



ファニー・メンデルスゾーン
(1805-1847)

また、世界最古のオーケストラと言われるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者となり、34歳の頃にはライプツィヒに音楽院を創設した。そうした多忙な人生のなかで、彼は数々の傑作を残し、その多くが現在でもコンサートの定番的な作品として演奏されている。メンデルスゾーンは1847年に姉ファニーの死の知らせを受けて大きなショックを受け、いったんは立ち直ったものの、同じ年の11月にライプツィヒで亡くなった。38歳であった。

メンデルスゾーン

序曲『美しいメルジーネの物語』Op. 32

作曲:1833年 初演:1834年、ロンドン

ヨーロッパにも日本にも人間と動物の結婚(あるいは同居)を描いた「異類婚姻譚」というジャンルの伝説がたくさんある。日本では例えば「鶴の恩返し」がその代表だが、この序曲のタイトルにある「メルジーネ」もフランス起源のそうした伝説の主人公で、メリュジーヌ(かつてはメリサンドとも呼ばれていたらしい)という上半身は美女、下半身は蛇という「水の妖精」のことを意味している。

その伝説を元にクロイツァーという作曲家が書いたオペラがあり、メンデルスゾーンは1833年にベルリンでそれを観た。しかし、歌手は気に入ったが、音楽は気に入らなかったようだ。そこで1834年の姉ファニーの誕生日のプレゼントとして、新しく自分のアイディアによるそのオペラのための序曲を考え、それをまとめたのがこの作品である。冒頭の4分の6拍子による弦楽器のアルペジオは後のワーグナー『ラインの黄金』の音楽にも繋がるイメージがあり、音楽全体はこの劇の悲劇的な一面と夢幻的な一面を両方とも表現している。初演はイギリスで行われた。

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op. 64

作曲:1842~44年 初演:1845年、ライプツィヒ

メンデルスゾーンを代表する傑作と言え、誰もが最初に思い出すのがこの「ヴァイオリン協奏曲 ホ短調」だろう。1835年にライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席指揮者となったメンデルスゾーンは、そのオーケストラのコンサートマスターに古くからの友人であり、ヴァイオリンの名手であったフェルディナント・ダヴィッド(1810-1873)を指名した。ダヴィッドとメンデルスゾーンは幼少期にハンブルクの同じ建物に住んでいたのだ。



フェルディナント・ダヴィッド
(1810-1873)

その後、1838年にメンデルスゾーンはダヴィッドに対してヴァイオリン協奏曲を書くつもりだと伝えた。当然、その時期から作品の構想は始まったのだろうが、実際に完成したのは1844年のことだった。本格的な作曲が行われたのは1842~44年にかけてと考えられている。その期間にはダヴィッドによる専門的な助言もあったと言う。初演は1845年3月13日、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ニルス・ゲーゼの指揮、ダヴィッドの独奏によって行われたが、初演時にはメンデルスゾーン自身は体調を崩して出席していなかった。

全体は3つの楽章から構成されているが、その3つの楽章はすべて繋げられていて、楽章間の休みはない。**第1楽章**は「アパッシオナート」と指示されているように、内面に燃えるような情熱を感じさせる音楽で、楽章の途中にはソロ・ヴァイオリンによるカデンツァが置かれている。このカデンツァについては、メンデルスゾーン自身によるものと考えられていたが、現代のヴァイオリニストであるダニエル・ホープの研究によると、メンデルスゾーンが書いたものではなく、初演時にダヴィッドが書いたものを使っているということだ(注・筆者によるホープへのインタビューの際の発言)。それゆえ、このカデンツァを新しく自分で書くというヴァイオリニストも最近では見かける。ファゴットの演奏で続く**第2楽章**はアンダンテ、そして**第3楽章**はアレグレットで始まりモルト・ヴィヴァーチェという華やか、かつスピード感のある形で展開される。

チャイコフスキーの「ヴァイオリン協奏曲」と並び、ヴァイオリニストにとっては必ず演奏しなければならない作品であり、ベートーヴェン、ブラームスと並んで、ドイツで初演された3大ヴァイオリン協奏曲のひとつでもある。

メンデルスゾーン

交響曲第4番 イ長調 Op. 90 『イタリア』

作曲:1830~33年 初演:1833年、ロンドン

メンデルスゾーンは生涯に17曲もの「交響曲」を書いているが、そのうちの12曲は弦楽器のみによるもので、管楽器も含んだ作品としては5曲が残されている。その作品の番号は必ずしも作曲順ではなく、この「交響曲第4番」は第1番、第5番に続く3番目の交響曲となる。

作曲年は1830~33年。つまりメンデルスゾーンがまだ20代はじめの時期である。イタリア旅行中に構想が沸き上がり、一度は中断されたが、1832年にロンドンのフィルハーモニック協会から作曲依頼を受けたことにより、1833年1月から3月にかけて集中して作曲に取り組み、この交響曲を完成させた。初演は1833年5月13日で、メンデルスゾーン自身が指揮をした。

全体は4つの楽章から構成される。**第1楽章**はまさにイタリアの風と光を感じさせるようなヴァイオリンによる第1主題(イ長調)が印象的で、第2主題(ホ長調)はファゴットとクラリネットによる穏やかな音楽となる。**第2楽章**はニ短調で、憂いを感じさせる。**第3楽章**はメヌエットのような雰囲気を持つ。**第4楽章**は「サルタレロ」というローマの民衆の間で流行したテンポの速い舞曲のリズムを取り入れた、動きの多い音楽。メンデルスゾーンは、この作品で、第1楽章はイ長調で最終楽章はイ短調で終わるといった例外的なアイディアを採用している。

かたぎり・たくや(音楽ライター)／早稲田大学卒業。大学在学中からフリーランスの編集者&ライターとして仕事を始める。1990年頃から本格的にクラシック音楽についての執筆を開始。「音楽の友」「レコード芸術」「モーストリー・クラシック」などのクラシック音楽専門誌に寄稿している。これまでの著作に『クラシックの音楽祭がなぜ100万人を集めたのか』(ぴあ刊)などがある。